

[原著論文：査読付]

協定校(中国)留学生の日本語教育における課題
－中国および日本での日本語学習意識調査をもとに－

楊 慧¹⁾，吳 素蓮²⁾，松田 高史³⁾，沙 秀程⁴⁾

Issues Relating to Japanese Language Education of Internal
Students from Affiliated Universities in China: Based on a
Survey of Attitudes of Chinese Students in Both China and
Japan Regarding Japanese Language Education

Yang HUI¹⁾，Sulian WU²⁾，Takafumi MATSUDA³⁾，Xiucheng SHA⁴⁾

Abstract

The article presents the research and analysis of the Japanese language learners from Tianhua Institute of Shanghai Normal University and Wentian Institute of Hehai University. Through questionnaires and analysis of the findings from the surveys, this study closely examines the students' attitudes as well as their abilities in Japanese language acquisition. At the same time, it offers an evaluation of specific language skills of these learners. Furthermore, this study has made valuable observations of Japanese language program at Wentian Institute from various perspectives, which will help us better understand what level of Japanese language skills a student should have in order to be successful academically when entering a study-abroad program in Japan. This also provides us with new topics for future research studies, such as how should we teach Japanese language in China in order to better prepare Chinese students who are planning to major in various academic fields in Japanese higher education institutions.

KEY WORDS : Questionnaires, Japanese language education, Tianhua Institute, Wentian Institute

1) 河海大学文天学院
2) 上海師範大学天華学院
3) 九州共立大学名誉教授
4) 九州共立大学共通教育センター

1) Hohai University Wentian College
2) Tianhua Institute of Shanghai Normal University
3) Kyushu Kyoritsu University, Professor emeritus
4) Kyushu Kyoritsu University, Career and General Education

1. はじめに

海外協定校（中国）留学生の日本語学習意識と日本語教育について

九州共立大学（以下、九共大）には、2+2システムで中国の協定校から毎年多数の留学生が編入学する。彼らはどのような意識・目的を持って留学するのか、彼らに対する九共大の日本語教育の実情はいかなるものであるか。そして、留学を終えた彼らの進路は？

後者、すなわち九共大における日本語教育の実情については、前回の紀要執筆時にアンケート調査をおこない、その集計結果を示した¹⁾。また、前者については、当論文の共同執筆者（松田）が現在、上海師範大学天華学院で日本語教育に従事していることから、担当科目の受講生に対して日本語学習意識調査をおこなった。

本稿では、上記2つの調査を基に、協定校および九共大における日本語教育のあり方、特に留学を目指した学生に対する協定校の支援体制、あるいは日本語を学ぶ学生の学習意識や卒業後の就職・進学状況について考察し、今後、留学を希望する学生に対して協定校と九共大とで、日本語教育においていかなる連携が必要であるかを探る。

今回の論考では2つの独立学院、すなわち河海大学文天学院（安徽省馬鞍山市）（以下、文天学院）と上海師範大学天華学院（上海市）（以下、天華学院）を直接の対象とする。そのうち、天華学院は学科の一つとして「日語科」を有し、一方の文天学院には専科としての日語科が設置されていないという違いがある。

「日語科」設置の有無による日本語教育のあり方、学生の日本語能力習得度合いの違いなどを、以下で具

体的に検証するが、まずは表1および表2にそれぞれの学院の学科構成を示す。

表2 天華学院の学科等構成

学院	学部	学科
工学院	機械・電子など	7学科
管理学院	国際商務など	5学科
教育学院	学前教育など	3学科
芸術設計学院	環境設計など	4学科
語言文化学院	英語・日語・ドイツ語 漢語国際教育・漢語言文学	
健康学院	応用心理学など	2学科
通識学院	通識教学部など	3学科

2. 日本語学習者の意識調査

日本語学習に対する意識については、2つの調査から一定の結果を得た。一つは天華学院日語科学生の学習意識であり、もう一つは九共大で学んでいる留学生から得た結果である。なお、後者については、前回紀要執筆以降に新たに文天学院からの留学生に対するアンケート調査を実施したので、その結果を加味して第3章で論述する。

また、意識調査ではないが、文天学院については、日本留学に向けた日本語教育の実情について、特に日語科を有しないことからくる課題などを考察した。

2.1 天華学院日語科学生の学習意識

天華学院日語科の学生に対する日本語学習意識調査は、共同執筆者（松田）が担当する以下の学生を対象に、授業時間の一部を使って実施した。

表1 文天学院の学科構成（文天学院HPより）

专业介绍				
专业类型	专业名称	专业层次	专业名称	专业层次
工学类	水利水电工程	本科	港口航道与海岸工程	本科
	交通工程	本科	土木工程	本科
	给水排水工程	本科	测绘工程	本科
	计算机科学与技术	本科	电气工程及其自动化	本科
	自动化	本科	机械工程及自动化	本科
	通信工程	本科		
管理学类	工程管理	本科	人力资源管理	本科
经济学类	国际经济与贸易	本科		

1年生 担当科目: 会話 調査実施学生数: 31人
2年生 担当科目: 作文 調査実施学生数: 28人
3年生 担当科目: 作文 調査実施学生数: 36人
※男子学生の比率は、1年生が約2割、2-3年生がそれぞれ約1割で、女子学生が圧倒的に多い。

調査については、紙幅の関係で、得られた結果とその分析のみを以下に述べる。

調査ではまず、1) 日本語を学ぼうと考えた理由、2) 大学で身につけた日本語を将来どのように生かそうと考えているか、3) 卒業後の具体的な進路について尋ね、それぞれ記述式で回答させた。次に、これまでの学習で身につけた日本語能力を、聴解、会話、作文、読解、日本文化理解の5項目について、それぞれ5段階で自己判定させた。

予想されたことではあるが、1) 日本語を学ぼうと考えた理由では、各学年共通して「日本のアニメ」「日本文化」を挙げた学生がもっとも多かった。また、「日本に興味・関心がある」と答えた学生も、調査後に尋ねたところ、やはりそのきっかけはアニメであり、あるいは日本のアイドル歌手やドラマ、スマホゲームなどであった。携帯・スマホが日本以上に手放せない環境にある中国の学生にとって、動画サイトで見られる日本のアニメや日本に関する番組などを通じて、日本文化にそれとなく親しみや興味を抱き、そのために日本語を学ぼうと考えたことがうかがえる。

また、各学年で数人ではあるが、日系企業に勤めたいのという回答をした学生がおり、なぜそう考えたのかということは、機会があれば別途尋ねてみたいところである。

次に2) 日本語能力を将来どのように生かすかという設問への回答では、学年により差が生じた。1年生では、半数程度の学生が「日本旅行」「日本人との交流」と回答した。日本語を学ぶということが、まだ〈夢〉の段階にあるようである。

2年生になると、日本語学習の難しさが身にしみてくるのか、「(可能であれば) 日系企業に就職」という少し腰が引けた回答であったり、「わからない」あるいは無回答が増える。現実を見据えて少し戸惑っている様子がうかがえる。これが3年生になると、卒業後の進路をそろそろ考えなければいけない学年ということで、「日系企業就職」「日本語翻訳者」「日本語教師」という具体的な回答が多くなる。

それでは、その将来の実現に向けて、大学卒業後の進路はいかにという3番目の問いかけであるが、この

設問に対しても3年生はより現実的な回答が多かった。全体的な傾向としては、中国の大学院に進学したあと、日本語教師を含む〈教師になる〉という考え方が強く出ており、ついで日本への留学から日系企業就職というパターンもそれなりに存在した。一方で、女子学生には、日本で就職を考える学生はほとんどいなかった。

2年生では、将来に対する設問と同様に卒業後の進路についても、決めかねている様子がうかがえる。3年生と同じく日本留学→日系企業という回答や、(日本語) 教師と書く学生がいる一方で、具体的に考えられない曖昧な回答が目につく。逆に1年生の回答を見ると、将来の夢そのままに、日本留学、大学院進学と答えた学生が多く、卒業後のことはまだ先のことというのが、彼らにとっては正直なところであろう。ただ、1年生の段階で「日本留学」と書いた学生のうち数名は、実際に2年生の段階で留学を実現させていることから、留学への強い意識を持った学生は、2+2のシステムを有効に活用することを、当初から考えて入学しているように思われる。

いずれにしても、3年生まで進んでくると、卒業後の就職のことは否応でも考えざるを得ず、特に女子学生のほとんどが就職する中国では、大学院に進学して中国で教師になるというパターンが主流になることは、調査の対象学生の大半が女子学生ということからすれば、さもありなんというところであろう。

次に、そうした学生の日本語能力習得度合いの自己判定を見てみたい。1年生の場合、基礎日本語を集中的に学ぶので、聴解力についてはある程度できるという回答が多く、一方で日本語を読み、話す力、書く力はまだまだと考える学生が大半である。もっとも、作文については、2年生から授業が始まるので、無理もない。これが2年生になると、日本語学習内容のレベルが上がるせいか、聴解に難を感じる学生が増え、作文についても苦手とする学生の割合は1年生の時より増えている。

3年生では、各項目とも能力が身につけてきたと考える学生が多い反面、作文については、文字通りの作文から卒論をにらんだ論文作成に重点が移るため、やや難しいと感じる学生が出てくる。

一方、日本文化理解については、能力というよりは関心の度合いに左右されるので、日本語能力の向上とともに理解度は高まっていく傾向にある。

この自己判定結果から総じて言えることは、特に作文能力についての自己判定結果が低いということ、会話についても不十分とする学生が多いこと、すなわち

読めるが書けない、話せないと感じている学生が少なからず存在することである。筆者は2年生および3年生の作文授業を担当しているが、現場において感じられることは、書けなくはない、すなわち何を言おうとしているかはある程度わかるが、日本語になっていない、という状況がほとんどということである。また、作文の内容を口頭で説明させても、「理路整然」と話すことができる学生は少なく、読解力との落差が露呈する。この落差は、日常的にネイティブの日本人と接し、日本語で文を書いてやりとりする機会がほとんどないという、彼らにとっては環境から来る問題とも言える。

ただ、筆者と課外活動で毎週接している日語科の学生ではない他学科の学生で、日本や日本語が好きで、書けない、読めないけど会話には不自由しないという学生が数人いる。そうしたことがあるのは、語学学習の面白い側面ではあろう。

ともあれ、日本語学習のきっかけとして日本のアニメが好きという学生が圧倒的に多い。なにゆえに日本のアニメにそれほど魅了されるのか。筆者も授業中にそれとなく尋ねてみたりしたが、このことについては先行研究も多々あることから、いずれ別稿で論じてみたい。

2.2 文天学院における日本語教育

河海大学文天学院は2009年に西日本工業大学と提携し、2+2共同教育プログラムを開設した。専攻は土木工学科と国際貿易コースである。現在まで5期の学生を日本へ送ってきたが、2016年からは国際貿易コースの学生のことを考えて、九州共立大学とも提携を結んだ。したがって、それまで西日本工業大学に送っていた国際貿易コースの学生は、この年より九州共立大学経済学部で留学することとなった。

ところで、国際貿易コースの留学生は、名称のとおり〈日本語学科〉の学生ではない。あくまでも、経済・経営を専攻する学生である。しかし、彼らが九共大に留学するにあたっては、編入学の条件である日本語能力試験2級(N2)程度の日本語能力を要することから、別途「日本語クラス」を設けて、留学希望者を対象とした日本語学習を行っている。留学希望の学生が増えるにつれて、現在、日本語クラスを担当する教員数は設立当初の2名から4名に増えた。そのうち1名がネイティブ日本語教員である。中国人の日本語教師は日本文化や日本経済を専攻とする教員であり、大半が日本への留学を経験している。

2.2.1 カリキュラムと授業時間

日本語クラス開設の主目的は、留学に対応できるN2程度の日本語能力習得であるが、あわせて日本での生活に必要な日本語および日本についての知識、特に日本の文化と社会に関する理解の向上も目指す。

カリキュラムは、大きく分けて基礎日本語と日本語会話の2つである。基礎日本語は、中国人教員が担当する。中国語による説明が中心になるが、中国語を介して日本語のことばの意味や文法を学ぶ。基礎知識をしっかりと身に付けることを目標とするこの科目は、1年生と2年生それぞれ週に4コマ(1コマ=90分)の設定となっている。

日本語会話は日本人教員が担当し、日本での大学生活を念頭に、学生たちの日本語コミュニケーション能力向上を目標にしている。授業時間数であるが、1年生は週1コマ、2年生は週に6コマが設定されている。したがって、文天学院日本語クラス通しての授業時間数は、1年生が週に5コマ(7.5時間)、2年生は週に6コマ(9時間)で、計11コマとなる。時間数としてはもちろん日本語専科のある大学に比べると少ないが、その少ない時間で効率の良い学習をめざして、学生が楽しくかつ主体的に授業参加できるように日本語教員は努めている。

2.2.2 クラス分けと使用教科書

各クラスを30人以内に絞る少人数クラスとするため、新入生は入学後にランダムに3つのクラスに分けられる。1年生の段階では基礎日本語を学ぶことになるが、授業では上海外国語教育出版社が出版する『新編日本語』(全4冊)を教科書として、その1冊目と2冊目を中心に学習する。1年生を終了した時点で、五十音や「が」「の」「を」「に」「で」「と」などの格助詞、「ばかり」「だけ」「さえ」「ほど」「ぐらい」などの副助詞、「なら」「ば」「たら」「から」「ので」「ても」「のに」などの接続助詞、および動詞の活用、尊敬語、謙譲語、丁寧語の使い分けなどの学習を終える。

2年に入ると、日本語能力試験に合わせて、授業を「聴解」、「文法」、「読解」の三つに分け、中国人教員3名はそれぞれ得意分野を担当する。1年間の日本語学習を経て、やはり日本語能力習得度合いに個人差が大きく出てくるので、学生のレベルに合わせてクラスを上・中・下に再編し、上・中クラスでは日本語能力試験N3を目指して、華東理工大学出版社から出版されている『N3模擬試験』を教科書として使用する。

下位クラスでは、さらなる基礎力強化を図るため、1年生で学んだ文法を復習しながら、日本語能力試験N5およびN4レベルの聴解と読解を練習する。

日本語会話について言えば、1年生では土木コースと国際貿易コースの2クラス編成で、『みんなの日本語』を中心とした授業が行われる。2年生になると、基礎日本語と同様に、学生のレベルによって2クラス編成となる。会話1コマの授業においては、全員が2～3分ずつのスピーチをおこなうとともに、40～50字程度の短い文章の聴解、書きとりが毎回課せられる。

2.2.3 補講・短期体験留学

前項で述べた正規の日本語授業とは別に、1年生を対象にして、学年終わりの毎年7月に補講授業を実施している。授業は月曜から土曜までの4週間で、一日6時間平均。補講全体で計算すると144時間の授業時間数である。補講のクラス編成であるが、学生のレベルによって2クラスに分けられる。

上位クラスは、聴解能力や読解能力の向上を目指す。下位クラスでは、一年間の勉強で不足しているところを重点に、たとえば漢字、語彙、文法などを補う。

さらに、補講の一環として、毎年7月に約1週間の日本への短期留学を行う。提携校の学内の施設見学、講義受講、地元企業の見学などを体験する。翌年の留学に向けた準備と位置付けられるこの短期留学は、文天学院のユニークな取り組みとも言える。参加したほとんどの学生がこの企画を通して、自分の日本語能力に物足りなさを感じ、また日本での体験がよい刺激となり、帰国してからさらに日本語勉強に励む。学院にとっても、また受け入れる日本の大学にも負担の大きい企画ではあるが、学生への学習還元効果はそれに見合って高いものがある。

2.2.4 課外活動

文天学院では、毎年11月に文化祭を行う。日本語、英語、韓国語クラスの学生たちは、ネイティブ教員の指導のもと、それまでに学んだ語学力を駆使してそれぞれの国の文化を披露する。と言っても、メインとなるのは各国の料理の紹介ではあるが。

日本語クラスの場合で言えば、たこ焼きを始め、カレーライス、味噌汁などの簡単な日本料理を作り、販売する。本格的な〈日本料理〉とは言えないものの、食材や道具の用意、本番前のリハーサルまで含めて学生とネイティブ教員が相談協力しながら準備を進める。この課外活動は、先述の短期体験留学とともに、平常

の授業では経験できない日本語学習、特に生きた日本語を使う機会として貴重である。学生はネイティブ教員と日本語でのやりとりをしながら、作業を通じて日本的なものを肌で感じ取り、ひいては異文化理解への関心をさらに高めるといった効果が大きく期待できる。

2.2.5 授業到達目標と授業実績

これまで、文天学院日本語クラスの授業概要について述べてきたが、以下ではその授業の実績・実情、今後の課題などについて考えてみたい。

まずは、それぞれの授業が掲げる到達目標と実績についてである。

1年生の授業到達目標としては、①日本語の文字、単語、短文が読めること、②音の聞き分けができること、③簡単な話を聞いて必要なことが理解できること、④単語、短文が正確に発音できること、⑤場面に応じて、簡単な会話ができることが挙げられる。

2年生の授業到達目標は、①文章の構成を正しく理解し、要求された内容を読み取れること、②テレビ、ラジオ、映画の内容をある程度理解できること、③まとまった内容の話ができ、報告や自分の意見を述べるができることである。

実際は、1年生を終了した時点で、個人差がかなり出る。N3に合格できる力を身に付けるのは、1割もしくはそれ以下の数の学生である。一方で、約3割の学生は、得点が70～90点にとどまる。いずれにしても、ほとんどの学生は聴き取りに困難を感じるようである。

2年生終了時点では、N3に合格する学生数は2割から3割に上昇する。とはいえ、合格学生を含めてほとんどの学生は、場面に応じた適切な会話やディスカッションは相変わらず苦手である。

2.2.6 日本語学習における課題

〈1〉日本語活用の機会が少ない

文天学院では、朝7時20分から45分まで、夜は7時から9時までそれぞれ自習時間が設定されている。この自習時間での日本語学習の中心は「書く」こと、「読む」ことであるが、2年生は日本語能力試験受験を目指した筆記試験対策の学習も行っている。文字通り「自習＝自分学習」であり、誰かを相手とする会話学習は学習内容に入っていない。普段の授業でもそうであるが、日常的に日本語を話すという機会が極端に少ないため、会話を苦手とする学生が多い。せっかくの自習時間ではあるが、日本語活用力の向上にはなかなか利用できていない。

日本語活用、特に会話という点では、文天学院が所在する馬鞍山市は不利な面が別に存在する。すなわち、上海、南京といった都会と比べると、日本からの留学生や、日系企業数などははるかに少なく、日本語に触れる機会、いわば普段の日本語教育環境には大きな格差がある。日本語を使いたくとも使う場がほぼない、というのが現状である。

〈2〉日本人との交流が少ない

この課題は、中国においてではなく、日本に留学した学生をめぐる問題である。日本への留学を実現させて日本語環境に置かれたにもかかわらず、日本人と交流しないまま過ごす学生が多いのである。中国人に限られることではないかもしれないが、概して留学生は同じ国からの留学生同士で固まる傾向が強い。協定校からも、中国語ばかり話す中国人グループが目につくということをよく聞かされる。

実際、留学生が送ってくるブログにアップされた日本での食事会や誕生日パーティーの写真に映っているのは、留学生同士だけということがほとんどである。そうした留学生に事情を聞いてみると、間違いを恐れて日本語で話すことを躊躇して、積極的に日本人に声をかけ難いとのことである。なんとももったいない話である。留学先では、現地語での会話が生活の中で重要であるはずなのに、おそらくは自信のなさからくる躊躇から、話しかけるタイミングを逸しているのが実情であろう。これは、先述した中国の授業での会話の機会が少ないということと相関関係にある。なんとかしなければならない課題と言えよう。

〈3〉日本語学習時間が絶対的に少ない

文天学院には学科としての日本語学科がなく、平素は自分の専攻科目の授業が主体である。当然ながら、専攻科目である以上、学科毎の専門性の高い授業や予習・復習に追われる。日本留学を志す学生は、それに加えての日本語学習である。精神的にも肉体的にもかなりハードであると言わざるを得ない。

一方、留学先では、中国の大学で特に下学年生に課せられるような強制的な自習制度はなく、常に自主的な学びが尊重される。そのため、日本での生活に慣れたころには、時間的な余裕もあることから、観光旅行に出かけたり、あるいはアルバイトに時間を費やしたりする学生も少なからずいる。日常会話にはある程度困らないからである。しかし、留学しても、余裕のある時間を自分の日本語力向上に努めないと、学業の面での実績を積むことはできない。この辺の問題は、協定校とも連携して、留学生の勉強時間の確保を図り、

勉学を疎かにしないような手を打つ必要があるように思う。

〈4〉日本語教員の問題

以上述べてきたように、文天学院では、日本留学に向けた日本語学習が効果的になされるよう、現状での課題を認識しながら、授業や補講、課外活動をこなしている。その上でもう一つ指摘しておきたいのは、文天学院の日本語教師の問題である。

文天学院には学科としての日本語学科がないため、中国人の日本語教員の大半は、日本文化や日本経済を専攻としており、語学教育専門家というわけでない。そのため、日本語を語学として教育・教授するための教授法に習熟しておらず、教授能力の不足という状況がどうしても現れてしまう。

今後は、教授能力を高めながら、共同教育プログラムに相応しい教育教授法を検討しなければと考えている。その上で、留学先の日本で日本人の友だちを積極的に作ることでできる学生を育て、一方で、気軽に日本人学生と交流できる楽しい環境作りを、協定校とも連携して模索したい。

3. 九共大留学生の日本語学習意識

前稿「日中協定校における日本語教育カリキュラムの比較研究」¹⁾に九共大に編入学した中国人留学生を対象に実施したアンケートの集計結果を掲載したが、その分析については、紙幅の関係で、主として「協定校の立場からみた九共大の日本語教育」についての考察にとどめ、留学生の中国における日本語学習の状況、あるいは留学生生活の満足度についての自由記述結果の分析は割愛した。

本稿の中心主題が日本語学習意識の考察にあることから、以下、前項までの論述に対応する形で、留学生の中国での日本語学習状況・学習意識を、アンケート結果から考察してみたい。なお、本アンケート調査は、平成27年（2015年）1月に在籍していた留学生を対象に実施したが、その後、平成28年（2016年）9月に文天学院から15名というまとまった人数の学生が編入学してきたことから、彼らに対して追加の形で平成29年（2017年）1月にアンケート調査をおこなった。その際、編入学後1学期間を経過していないということで、中国での日本語学習状況を問う設問に絞り、九共大での日本語教育についての設問は省略した。文天学院の留学生に対するアンケートの結果は右記の通りである。なお、前稿に掲載した編入年次別を含むアン

ケート結果から、全対象学生をまとめた結果（以下、全対象と記す）のみを、あわせて示している。

各項目で最多の人数の部分は網掛けをし、文天学院と全対象との間に5ポイント以上の差がある項目については、太線囲をした。

右表の結果を人数の数値で見ると、日本語学科から留学してきた編入生と日本語学科のない文天学院から来た留学生の間で、中国での日本語学習に関しての設問回答に、差異はほとんどないように見える。しかしながら、これを回答者の割合表示にすると、特徴的な違いが浮かび上がってくる。

まずは日本に来る前に取得した日本語検定の級であるが、全対象の学生ではN1レベルが22%であるのに対して、文天学院については7%にとどまっている。N2についてみても、7ポイントの差がある。やはり日本語学科の有無の差が出るであろう。

※「不明」という回答が両者とも一番多いが、おそらくは調査時点でまだ試験の結果がわからないということだと思われる。いずれにしても、要確認である。

次に、中国での日本語学習の内容であるが、両者とも「聴解」が一番多いのは変わらない。ただ、「会話」「日本文化」「翻訳」となると、文天学院ではそこまで手が回らないというのが実情であろう。また、「基礎（総合）日本語」にも大きな差が出ているが、これも授業時間数の差が影響していると思われる。なお、「ビジネス日本語」に関しては、大学の差が出るので、特に問題視する必要はないと思われるが、留学先が経済学部であることを考えると、いくらかでもビジネス日本語を習得しておけば、留学後の経済専門の授業の際には有利となる。

自分がどの程度の日本語能力を身に付けているか、特に日本語での授業についていけるかを問う設問に対しては、全対象では「非常に充分」および「ある程度充分」をあわせて60%近くに達しているが、逆に文天学院の学生は「どちらとも言えない」「困難がある」という回答が合わせて60%になる。

一方、会話力・コミュニケーション力を問う設問では、両者とも半数以上が「よくできる」もしくは「ある程度できる」と回答したものの、文天学院の場合は「どちらとも言えない」が40%ある。ただ、文天学院の学生の場合は来日してまだ数ヶ月足らずであり、また、コミュニケーションについては個々の意欲にも左右されるので、1年以上を経過した時点で改めて文天学院の学生に尋ねてみれば、今回とは異なる結果が得

表3 九共大の留学生に対する日本語学習に関するアンケート調査結果

	文天学院 0.5年経過学生 編=15 回答学生 15人		前回アンケート 対象 編入学生 87人 回答学生 78人			
A. 中国での日本語修得状況						
1) 中国の大学2年間の日本語勉強で到達した日本語能力のレベル						
1. N1レベル	1	/	7%	17	/	22%
2. N2レベル	3	/	20%	21	/	27%
3. N3レベル	3	/	20%	10	/	13%
4. N3レベル未満	1	/	7%	3	/	4%
5. 不明	7	/	47%	26	/	33%
2) 九共大に留学するまでに中国の大学で習った日本語の科目(複数回答)						
1. 聴解	13	/	87%	73	/	94%
2. 会話	11	/	73%	71	/	91%
3. 作文	11	/	73%	57	/	73%
4. 文法	12	/	80%	65	/	83%
5. 読解	12	/	80%	60	/	77%
6. 日本文化	3	/	20%	37	/	47%
7. 基礎(総合)日本語	8	/	53%	69	/	88%
8. 翻訳	2	/	13%	37	/	47%
9. ビジネス日本語	2	/	13%	16	/	21%
10. その他	0	/	0%	0	/	0%
4) 現在の日本語能力は専門科目の学習に充分なレベルになっているか						
1. 非常に充分である	0	/	0%	3	/	4%
2. ある程度充分である	6	/	40%	41	/	53%
3. どちらとも言えない	5	/	33%	18	/	23%
4. 困難がある	4	/	27%	14	/	18%
5. かなり困難である	0	/	0%	2	/	3%
5) 日本語でコミュニケーションできるか。						
1. よくできる	2	/	13%	9	/	12%
2. ある程度できる	7	/	47%	44	/	56%
3. どちらとも言えない	6	/	40%	18	/	23%
4. 困難がある	0	/	0%	5	/	6%
5. 非常に困難である	0	/	0%	2	/	3%
6) 中国の大学で意欲的に日本語の学習をしたか						
1. 意欲的にした	3	/	20%	26	/	33%
2. ある程度意欲的にした	7	/	47%	25	/	32%
3. どちらとも言えない	4	/	27%	19	/	24%
4. あまり意欲的ではなかった	1	/	7%	7	/	9%
5. 意欲的にはしなかった	0	/	0%	1	/	1%
7) 自分の今までの日本語勉強方法と勉強態度に満足しているか						
1. 満足している	0	/	0%	5	/	6%
2. ある程度満足している	7	/	47%	39	/	50%
3. どちらとも言えない	5	/	33%	18	/	23%
4. あまり満足していない	2	/	13%	12	/	15%
5. まったく満足していない	0	/	0%	3	/	4%

られるかもしれない。

その「意欲」であるが、勉学には欠かせない要素である。そこで、中国での日本語学習に意欲的に取り組んだかどうかを尋ねたところ、両者ともに「意欲的にした」と「ある程度意欲的にした」をあわせた回答の割合は60%を越えた。また、その学習についての満足度を尋ねた設問では、全対象学生で「満足している」と回答した学生が数人いるものの、「どちらとも言えない」「あまり満足していない」「まったく満足していない」と答えた学生はともに40%を越えている。

この結果をどう考えるか。実際に日本に来て、もう少し日本語を勉強しておけば良かったという自省から来る結果であれば、学習意欲の向上につながると思うが、どうだろうか。

ところで、そうした〈自省〉を踏まえて、留学前にもう少し学習しておきたかった、あるいは留学を踏まえて大学に設けてほしかった科目などを、別途、自由記述で書いてもらった。その結果を眺めてみると、意外にも、というか想定外の回答と言うべきなのかわからないが、日本語そのものについての学習よりは、「日本文化」や「日本の歴史」を挙げる学生が多かった。もちろん、留学してからの時間が短い学生には「会話」授業の充実を求める声も多かったが、総じてもう少し日本のことを知って留学したかったという思いが強くにじんでいるように感じられた。

いずれにしても、このアンケート調査はあくまでも学生の自己判定である。かれらの日本語能力については、別途、日本語教育の授業を含めて普段の講義受講の様子や試験の成績などとあわせて考察すべきであるが、それについては稿を改めることとしたい。

4. おわりに

九共大には毎年、協定校から教員が派遣されて留学生の日本語教育にあたっている。逆に、九共大から協定校へ出向いて日本語教育に従事することは、これまでではなかった。そうした状況の中で、共同執筆者（松田）は昨年（2016年）3月に九共大を定年退職し、それまで協定校との共同研究に携わっていたこともあり、9月の新年度から天華学院の教壇に立つことになった。つまり、中国の現場で日本語を教えている。その体験と本稿で得られた学生の日本語学習意識とをあわせて考えてみると、改めて語学教育とは何かということに思いが至る。ちなみに筆者は、本来西洋史が専門であることから、こうした思いは語学教育が専門でない門

外漢の場違いな感じ方かもしれないが、言葉はあくまでもコミュニケーションの「道具」であり、その道具はそれが使われる時代的、歴史的、文化的背景を背負っている。日本語学科のある天華学院、そして日本語学科のない文天学院、両者の日本語教育と日本語学習意識を比較することになった本稿からは、語学教育そのものが持つ課題が浮かび上がったように思える。それは何か。その考察については、筆者の中国教壇での経験がもう少し増えたところで、改めて考えてみたい。その際、来日して留学生に日本語を教えた協定校教員の経験とも付き合わせてみると、今後の中国および日本における日本語教育のあり方に有効な道筋が得られるかもしれない、そうした有意義な結果が得られることを、後稿に期したい。

【注】

- 1) 于衛紅, 呉素蓮, 松田 高史, 沙秀程「日中協定校における日本語教育カリキュラムの比較研究」『九州共立大学研究紀要』第7巻第1号, 2016年9月, p.33-44.

【参考文献】

- 1) 呉素蓮, 松田 高史「天華学院における日本語教育の現状と課題 ～上級日本語教育実践を中心に～」『九州共立大学研究紀要』5-1, 2014年9月, pp.35-44.
- 2) 包阿榮「内蒙古大学日本語学部の学習ストラテジーについての一考察」『九州共立大学研究紀要』6-1, 2015年9月, pp.95-100.
- 3) 張傑, 山本洋一, 沙秀程, 方如偉「上海海洋大学における日本語教育の現状と課題 —基礎段階の教育実践を中心に」『九州共立大学研究紀要』8-1, 2017年9月, pp.15-21
- 4) 于衛紅, 高春元, 沙 秀程「中国における大学日本語教育の問題点について」『九州共立大学研究紀要』5-1, 2014年9月, pp.45-48.

Received date 2017年10月30日

Accepted date 2017年12月13日